



百体地藏堂前で厳修された地藏盆会（8月23日）

## 清水 第二三二号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・清水寺本堂舞台下から見上げる秋空

特集 清水寺第108回うらぼん法話 2

「夢が人を変える」 清水寺貫主 森 清範 3

「共感社会が招く未来」 総合地球環境学研究所所長 山極壽一 13

「紫式部と藤原道長」 同志社女子大学名誉教授 隴谷 寿 18

「法然上人と私の想い」 西山浄土宗総本山光明寺 八十八世法主 沢田教英 23

「難有りありがたし」 元綾部市長 四方八洲男 29

「清水寺・古写真館」門前に勢ぞろいした聞法の人たち 34

大西良慶和上法話「般若心経講話」④ 35

清水寺 長臈語り③ 清水寺長臈 森 孝忍 43

『四十手深要決義』を読む 第29回 清水寺執事 森 清顕 48

190年の時空超え観音の縁再び 清水寺学芸顧問 坂井輝久 56

雷と清水寺、深いご縁 清水寺学芸員 内田 孝 73

五明洞浄墨 佐伯定胤筆「良慶和上晋山賀詩」 80

『成就院日記』翻刻・刊行にあたって③⑤ 清水寺史編纂委員 吉住恭子 81

南部風鈴の音色15年 93

成就院で護摩行も 名古屋音羽の会 95

那須音羽の会 10周年記念法話会 96

湖北省から仏教訪日団 98

青龍会の看板、山梨清水会が奉納 100

輪島塗の品々授与で能登復興を支援 101

地元と行政、清水坂で清掃活動 103

神仏習合の研究者ら来山 105

今年の「みほとけ往来」 107

祇園祭・函谷鉾が奉納演奏 112

内外往来 110

編集後記 112

## ◆特集◆清水寺第108回うらぼん法話

今夏は、例年にも増しての酷暑の日本列島と報じられました。京都盆地も連日三十五度を超すなか、恒例の「清水寺うらぼん法話」が開かれました。八月一日の開白に始まり、五日の結願までの五日間、会場の大講堂の円通殿には、開場時間の午前五時過ぎから聞法の方々が次々に来山されました。午前六時の開始前には連日、円通殿がいっぱいとなり、法話の映像を同時中継する屋外のテント、洗心洞にも来山者が詰めかけました。

結願となる五日は、北法相宗管長で清水寺の森清範貫主が「夢が人を変える」と題して法話しました。各回とも例年にもまして社会の動きにも連動したテーマについて、各界で実践的に活動する人たちが専門的な見地から語りかけました。初日は、総合地球環境学研究所（京都市北区上賀茂）の山極壽一所長が「共感社会が拓く未来」と題し、激変する近年の地球環境も踏

まえて動物としての人間の近未来を展望しました。二日は、同志社女子大学の隴谷寿名誉教授が「紫式部と藤原道長」の演題で、NHK大河ドラマ「光る君へ」であらためて注目されている千年前の文芸作品の時代背景を清水寺とのご縁も合わせて語りました。三日は、総本山光明寺（京都府長岡京市粟生）の沢田教英法主が「法然上人と私の想い 立教開宗八五〇年を迎え」と題し、清水寺にもご縁の深い法然上人への自身の強い思いを吐露して九十年の人生を振り返りました。四日は、京都府綾部市長などを務め政治家として活躍する一方、中東和平の実現に向けて積極的に行動してきた四方八洲男さんが、近年のガザやウクライナでの戦火に強い懸念を示しながら、世界平和に向けた実践の大切さを示しました。

森貫主の法話は全文を掲載し、ほかの四講師については、要旨を掲載します。

# 夢が人を変える

清水寺貫主 森清範

暑い中、みなさまようお詣りいただきました。今年の「うらぼん法話」では、一段高い舞台ができていたのでですね。「清水の舞台から飛び落ちたらあかん」と注意を受けて、きょうはここにながりました。明治以降、廃仏毀釈で荒れた寺の復興に力を尽くしたのが大西良慶和上（一八七五〜一九八三年）です。和上は、観音信仰を流布するために全国に法話に参りました。毎年八月のこの「うらぼん法話」もそのような一般向け法話のひとつで、和上は観音信仰や唯識を説かれました。仏教修行者への施しの功德を先祖供養に結び付けて説く『盂蘭盆経』を講じたことから、「うらぼん法話」の名称になりました。今夏で百八回目です。当初は「暁天講座」という名称はなく、「うらぼん法話」として始まりました。うらぼん法話はコロナ禍の厳しい間も途切れるこ

となく、「三密」を避けて続けられてきました。コロナ禍が一段落し、たくさんの方にお詣りいただけ



法話する森清範貫主（8月5日）

るようになって、以前のようにご縁のある学校からの修学旅行生のみなさんに三十〜五十人とまとまって、この円通殿で、私の話を聞いていただく機会があります。その時は、清水寺を紹介するパンフレットをプレゼントし、最後のページにおひとりずつ「夢」など、それぞれ異なる漢字を書いてさしあげてきました。不思議にその字は、それぞれの方にぴたりになっていくんですね。

### 清水寺と修学旅行生のご縁

修学旅行生のみなさんが大人になった時に、パンフレットを取り出して旅行のことを思い出すこともあるでしょう。「ああ、久しぶりに清水寺に行ってみよう」と思ってくれるかもしれません。清水寺のことをもっとみなさんに知っていただきたい。将来の仏縁を願って、修学旅行のみなさんとお目にかかっているのです。

旅行後に、学校から送っていただく感想文を読むのが楽しみなんです。法話を終えて「握手してほしい」とおっしゃる方は、修学旅行生も一般の方も

女性に多いのはなぜでしょうか。感激した面持ちで「和尚さんと握手できた、もう手を洗わない」などと言う子供さんがいたりしますが、何のことはない、少し歩いて会場出口まで来ると、コロナ禍以降に一般化した消毒液をみなさん手にすりこむんですよ。「人間の心は複雑なんや」と、笑いながら寺務職員さんと話しています。

外国からの方を含む私へのお客様には、迎賓室で宇治のいちばんおいしい抹茶を、寺務の方が精魂込めて点ててくださいます。「お茶がおいしい」としばしばおっしゃられますが、毎朝、音羽の滝と同じ水源の水を汲んでいます。きょう会場のみなさんにお出ししているのも同じ水で淹れています。三本に分かれて落ちてくる滝の水には「若くなる」「賢くなる」「長命に」などの効力があるとも言われますので、ミックスされた水を飲まれたみなさんは、きょうお帰りの頃には効果が表れているかもしれませんね。

### 京都の地下水、文化育む

これは不思議な水なのです。七七八年に清水寺

が創建された頃、すでに音羽の滝は流れていました。細い滝ですが、千二百年間、枯れたことがないので。清水寺の東側にある東山は、標高二百メートル余りのさほど高くない山々でっしゃる、しかし、京都の地下には、十分な地下水が蓄えられているといふんです。

地震学者で京都大学名誉教授の尾池和夫さんが『京都新聞』への寄稿文で、京都盆地は百二十万年前からの活断層運動によって形づくられ、隆起する周囲の山から浸食された土砂が流れ出て沈降する盆地に堆積し、分厚い堆積層にたっぷり地下水が蓄えられている、と解説されていました。京都では、その地下水から茶道が生まれ、和菓子や懐石料理が発達し、美味しい酒に恵まれてきており、尾池さんは「変動帯の文化」と呼んでいます。千二百年前の清水寺の創建にも深く関わる音羽の滝の水は、百二十万年前につながっていると思っています。

清水寺があり、その北方には東山吉水という地名が知恩院さんのあたりにあります。南には泉涌寺さん。昨年の「うらばん法話」でお話いただいた八坂



菅井梅関『山紫水明処図巻』に描かれる頼山陽「山紫水明処」（手前）と鴨川を挟んだ東山の風景

神社の野村明義宮司によると、八坂さんの本殿の下に青龍が住む池があり、周囲を漆喰で固めていると言います。龍穴と呼ばれるこの池は、祇園祭の開始にも関わりのある東寺真言宗の寺・神泉苑（京都市中京区）の池につながっている、というのです。京都の寺社は、水の歴史とご縁の深いところが多いのです。

広島出身で、江戸時代後期の思想家・頼山陽（一七八〇〜一八三二年）は、東山の眺めに美しさを感じ、こよなく愛した方でした。「山紫水明」という言葉がありますね。夕暮れの西日が当たった山並みが紫に見え、鴨川の水面が夕日できらきら輝いているさまを表しているのですね。頼山陽は、鴨川西岸の書齋兼茶室から東方への美しい眺めにちなみ、書齋を「山紫水明処」と名付けました。庭に梅や楓を植えた「山紫水明処」は、今も中京区東三本木通丸太町上ルに残っています。ここで頼山陽は、文人らとの交流や思索を大いに楽しんだようです。

清少納言『枕草子』の冒頭、「春はあけぼの」から始まる一節は「やうやう白くなりゆく、山ぎは少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」と



須弥壇は、御本尊を奉祀する本堂内々陣の中央にある。内々陣には僧侶も立ち入れないが、8月の千日詣りでは一般の方も参詣できる

続きます。頼山陽とは異なり、「紫がかつた雲」は、次第に明るくなってくる朝景色を説明しています。

では、音羽山の「音羽」の語源は何に由来するのでしょうか。「おとわ」を「おと+いわ=音のする岩」と考える説があります。岩に仏が宿る、神が宿るとの説が「いわくら=磐座」ですね。「桜(さくら)」は「さ=神が宿る木」となり、「音羽山」は山がご神体であって、和上は「音のする岩の意味や」とも話しておられました。みなさん、いかがでしょうか。清水寺の本堂内々陣に鎮座する須弥壇の下には十五メートル程度の長さの土饅頭があります。未調査ですが、この中に山のご神体がおわすのではないかと考えています。内々陣には、千日詣り(八月九日~十六日)にお入りできますから、ぜひご覧ください。

九年後の二〇三三年は、三十三年に一度の清水寺本堂の御本尊御開帳であり、江戸初期に三代徳川家光公(一六〇四~五一年)によって本堂などが火災から再建されて四百年にも、また大西良慶和上の五十回忌にも重なります。

### 「おこもり」 観音様に祈る

たくさんの方々、庶民の方々がお詣りされてきた清水寺では、昔の人々は本堂に宿泊してお経を唱える「おこもり」をして、観音さんになんてお願いしたいかから祈り続けました。夏は暑く、冬は寒いのですが、信心とはえらいものです。二十一日間こもって祈る。観音さま、どうか私の願いをお聞き届けいただきたい、と。それが信心ですね。本堂で「おこもり」を体験された方は、ご自宅の自分の布団で休むわけではないので環境も変わり、だいたい夢を見たようです。

十六世紀に制作された絵図「清水寺参詣曼荼羅」まんだらは、鴨川の中州を経由する二つの五条橋から、清水坂近辺の他寺なども眺めながら清水坂を上って境内へ、さらに境内の諸堂をめぐる道筋を図解で紹介しています。諸堂の配置は、境内の入り口に描かれている泰産寺と子安塔が、明治期に現在の境内南西部に移転した以外は、現在とさほど変わっていません。地主神社には桜が咲き、描かれている人物は老若

男女。刀を差した人、馬に乗った人、傘を差す人など、衣装も身分もさまざまです。多様な参拝者をはじめ、時代を超えて清水寺の大本願・坂上田村麻呂公（七五八〜八二年）夫妻、寺を開いた延鎮上人（？〜八二年）ら歴史上の人物までも登場します。異時同図法ですね。

「おこもり」をして夢をご覧になると、自分の見た夢は、いったい何だったのかと考えます。「参詣曼荼羅」の世界には、夢を読み解く人物も描かれています。西門の階段を上がった場所には赤い衣の女性が座っており、この女性が吉夢、悪夢などそれぞれの夢の意味を教えてくださいました。

### 清盛が清水寺で見た夢

私が子供の頃までは、昼も夜も自由にお詣りできたのです。近年は防犯や防火などを考慮し、本堂でのおこもりはできなくなりましたが、歴史的には『更級日記』『源平盛衰記』などにも夢の話は登場します。平清盛（一一一八〜一一八二年）には、清水寺に千日間、お詣りに通ったとの伝承があり、おこもり



森清範貫主と語り合う桂米朝師匠。これに先立ち、清水寺で落語「はてなの茶碗」を披露した（茶店「滝の家」）

をした際に清盛が見た夢は、自身の目が飛び出るという不思議な内容でした。清盛は、清水寺の境内に夢の内容を説明した立て看板を置き、この夢を解釈できる人物を探しました。呼びかけに応じ、ある人が



「それは吉夢である。目が出る＝芽が出ることを意味する」と解説したのを受け、清盛は「自分がすっかりせなあかん」と自覚したのでしよう。実際、清盛を含む平氏は夢の後に空前絶後の繁栄を迎えていくのです。

源平の合戦と言えば、平氏方について藤原景清（生没年不詳）は、壇之浦の戦いの後にも東大寺の開眼供養に訪れた源頼朝（一一四七～一一九九年）の暗殺を謀って失敗するなどし、「源氏の世は見とうない」と、自らの眼球をくりぬいて清水寺の観音さんに奉納したとの伝承などから、「きよみずのかげきよ」とも称されます。三代目桂米朝師匠（一九二五～二〇一五年）が、二代目桂三木助（二八八四～一九四三年）の口演の記憶を基に戦後に復活された『はてなの茶碗』は、音羽の滝の前から始まっていくのです。米朝師匠と滝の前で対談した時、ストーリーを教えてくださいました。涙の出る人情落語で、二代目桂枝雀師匠（一九三九～一九九九年）も得意とされていましたね。

### 観音信仰映す落語『景清』

さて、落語『景清』もまた、清水寺にご縁の深い

落語です。米朝師匠が得意とされ、観音さんへの信仰が中心に据えられて笑いを呼ぶ作品です。病で失明した腕のよい鑿彫たがねり職人の定次郎が、観音様への信心のおかげで、清水寺で自らの病んだ眼球と、景清が奉納した眼球が入れ替わって目が見えるようになる物語です。実は、定次郎は、清水寺に詣る前にいったんは長岡京市の柳谷観音（楊谷寺）の観音さんに願をかけて満願の二十一日目を迎えました。観音さんの前で同じく目の不自由な女性とよい仲間になります。さらに、賽銭箱をひっくり返した金で一杯やっけてしまい、目が見えるようになりたいとの願いはかきませんでした。しかし、定次郎の腕を惜しむ甚兵衛から「清水の観音さんに信心込めたらどうや」と勧められ、景清の逸話から「清水さんは、まんなざら目に因縁がないこともない。一生懸命願をかけてみ」と助言されるのです。

定次郎は清水寺に日参し、百日目の満願がちょうど観音縁日の十八日に重なるこの日、観音さんから、景清の眼球を与えられて起こるどたばた劇です。落雷で気を失い、観音さんと直接やりとりした定次郎



景清が爪で掘ったと伝えられる小観音像を納める石灯籠（随求堂前の広場）

は、視力を取り戻したのはいいのですが、景清の眼を譲り受けたことで気持ちまで景清のようにふるまっています。ひと騒動が起きるところにおかしみがあります。定次郎は夢かうつつか、わからない世界をさまよっていたのでしょうか。

### 清水寺の創建は夢告から

夢は、決してむだにしてはいけません。そもそも、清水寺のはじまりは千二百年前、賢心（後の延鎮上人）が、子島寺を開いていた報恩大師（？）七九五

年）に弟子入りして学問を深め、修行を続けていた時に「奈良を離れて北に向かうように」との夢告を受け、北上して金色の水の流れをたどるうちに音羽の滝に行きついたところから、とされています。清水寺も夢から現実の寺が生まれたのです。親鸞聖人（一七三～一六二二年）にも夢のお告げがありました。比叡山を降り、六角堂におこもりをしている時に後に師となる法然上人（一一三三～一二二二年）と出会うきっかけとなる夢告を受けたのです。

今年には法然上人による浄土宗立教八百五十年ですが、曹洞宗第四祖・瑩山禪師（一二六八～一三三五年）の七百回大遠忌でもあります。禪師を育てた祖母・明智様（生没年不詳）は、八年間姿を消したことがありました。明智様の娘で後に禪師の母となる懐観様（？）一三〇九？。一三二四年説も）は、母の消息を知りたく清水寺に日参し、あすは満願という六日目に小さな十一面観音像を見つけて拾い、「母の消息がわかれば補修したい」と祈ったところ、明智様と再会できたのです。懐観様も、禪師を出産する前に多禰の観音さんに詣でています。

禪師も、夢にご縁がありました。能登（石川県）に諸嶽山総持寺（現・總持寺祖院、輪島市）を開くにあたり、門に入って諸堂棟を見回すと、「清水寺のある京都と同じく、壯観で仏法の縁が熟した霊場である」との瑞夢を見たときれています。禪師三代の一連の経緯を記した清水寺南苑の禪師顕彰碑の前でも毎朝、私は読経を続けています。

禪師は天上の月、人の心に写る月の「ふたつの月」をどうとらえるか（両箇の月）といった公案などを通じて、教えを説きます。瑩山禪師は、弟子の峨山韶碩（二二七五〜一三六六年）にこの公案を投げかけました。決まった正解のない問いかけに対し、峨山は懸命に修行を重ねて悟りに至った、と伝えられます。

心を考えることは、僧侶以外の専門家にも興味深い課題のようです。京都大学出身で分子生物学の専門家、村上和雄さん（一九三六〜二〇二二年）は「心の問題は実に難しい」と前置きしたうえで、「日常生活で『こうありたい』と願うことで体も心も変わる。思い続けることで、働いていなかった遺伝子が目覚める。遺伝子も後天的要素が大きく。自分の思いで

帰ることができると持論としていました。人の意識は、五感とともに働く「五俱意識」、五感とは無関係に働く「不俱意識」に分かれます。「五俱意識」は、「五同縁意識」「不同縁意識」から



清水寺南苑にある瑩山禪師三代の顕彰碑

成り立っています。「不同縁」は、あることがきっかけで心が働く意識のことです。日露戦争に際し、宗教の視点を交えて反戦を強く訴えた文豪トルストイ（一八二八～一九〇年）は、宗教によって人は心を方向転換させ、その人が見る世界を変えることができる、と主張しました。国際連合教育科学文化機関顕彰（ユネスコ憲章）には、「心の中に平和のとりでを築かねばならない」との一文があります。はたして戦争をやめるための方策が観念論でできるのか、との意見もあると思いますが、まずは心からですね。

世の中を変えるものは、ひとりひとりの思いであり、みんながその気持ちを発信していくことから、世の中を変えていくのだと信じています。いずれ無人のロボット同士での戦争などというけったいなことが起きるかもしれません。平和の大切さは、京都大学で国際政治を研究されていた高坂正堯先生（一九三四～一九九六年）も強く訴えておられました。なるほど戦争は、人間にとって不治の病かもしれないが、最後まであきらめずに治療にあたる医師のように戦争を止める努力を続けるのは人間の努めである、と

高坂先生は説いておられます。心の中に観音様の大慈大悲をしっかりと持つことが必要です。心の持ち方によって、世の中は変わります。きょうは早朝からありがとうございます。お詣りいただくことに感謝申し上げ、五日間の今夏の「うらぼん法話」を終わらせていただきます。

#### 第百八回 うらぼん法話供養者芳名

米原新三様、京都銀行東山支店様、エムエステイ  
保険サービス㈱様、㈱ケイ・ステージ様、川上  
浩子様、勘立明様、石田敬輔様、国枝恒治様、  
田中博武様、㈱桜土堂様、高瀬重樹様、川上和  
夫様、織田デザインエージェンツ様、六阿弥陀  
参りの会様、久保田喜久子様、中川保子様、上  
寿会様、京都スカイ観光ガイド協会様、みずほ  
証券㈱様、清水寺門前会様、清水寺御用達会様、  
坂本大輔様、安楽寺様、尾崎米栢様